

# 此鼎銘文考釈

——陝西省岐山県董家村出土青銅器の研究（三）——

竹内康浩

はじめに

第一章 此鼎・此殷銘文考釈

第二章 公臣殷銘文考釈

第三章 その他の諸器について

第四章 陝西省岐山県董家村出土青銅器の持つ意味

おわりに

はじめに

私は、先に「裘衛諸器銘文考釈」及び「牧牛匜銘文考釈」の二篇を著し、陝西省岐山県董家村から出土したとされ

此鼎銘文考釈

る青銅器について検討を加えてみた。本稿はその続編に当たり、当該青銅器群計三七件からこれまでに扱った五件を除いた残りの三二件の器をまとめて取り扱うものである。その中では、此なる人物によって作器されたものが鼎三件・殷八件と最も多いので、ひとまずそれらを頭にもつてくることとし、また本稿のタイトルもそれによって代表させることとした。なお、これまでは出土した青銅器の銘文に注目して論じて来たのであるけれども、青銅器群の中には銘文をもたないものもある。もちろんそれらも貴重な資料であるから、それらについても無視することなく扱うこととする。<sup>(1)</sup>

1 本稿が扱う器群は全て陝西省考古研究所・陝西省文物管理委员会・陝西省博物館『陝西出土商周青銅器(一)』文物出版社、一九七九年、に掲載されており、器影や拓本も大体はそれで確認できる。個々の器に関する情報はひとまずそれに譲り、該書に問題がある場合には以下本文中で述べ、個々の器の零細な著録は一々掲げないこととする。但し、同銘・同型の器が複数ある場合、該書は甲・乙…で区別しているが、他の著録でやはり甲・乙…を使いつつ実際には別の器を指している場合があるので、混乱を避けるため甲・乙…は用いない。代わりにA・B…を用い、『陝西出土商周青銅器(一)』の順番を基本にしつつ、それにA・B…を当てはめる、という形で区別することとした。例えば、『陝西出土商周青銅器(一)』の「一九六 此鼎甲」は本稿では「此鼎A」、該書「一九七 此鼎乙」は本稿では「此鼎B」、ということになる。諒解せられたい。なお、以下で「原報告」と称するものは、龐懷清ら「陝西省岐山県董家村西周銅器窖穴発掘簡報」『文物』一九七六年第五期、のことを指す。

なお、本稿が扱う三二件の基礎的なデータについては、表1としてまとめておいた。

表1 陝西省岐山縣董家村出土青銅器一覽 (本稿における取扱順)

器名	字数	時代	通高(cm)	口径(cm)	重さ(kg)	備考
裘衛毚	七三	西周中期	二三	二二・六	五・七	
裘衛盃	一三二	西周中期	二九	二〇・二	七・一	
五祀衛鼎	二〇七	西周中期	三六・五	三四・三	一一・五	
九年衛鼎	一九五	西周中期	三七・二	三四・五	一二・二五	
牧牛匜	一五七	西周後期	二〇・五	一七・五×一二	三・八五	
此鼎A	一一一	西周後期	四二・一	四〇	一九七五	
此鼎B	一一二	西周後期	三六	三六	一二・五	
此鼎C	一一一	西周後期	三三	三四	一〇・八	
此殷A	一一二	西周後期	二五・五	二〇	六・一	有蓋
此殷B	一一二	西周後期	二三・七	一九・二	四九・一	有蓋
此殷C	一一二	西周後期	一六・七	一九・九	三七・五	
此殷D	一一一	西周後期	一六・五	一九・五	三五	
此殷E	一一二	西周後期	一七・三	一九・九	四六	
此殷F	一一二	西周後期	一七・四	二〇	四八・五	
此殷G	一一二	西周後期	一七・八	一九・九	五・〇五	
此殷H	一〇九	西周後期	一八・二	一九・八	四八・五	
公臣殷A	四三	西周後期	二〇・八	一九・五	四四	有蓋
公臣殷B	四三	西周後期	二一・五	二〇	四三	有蓋
公臣殷C	四三	西周後期	一五・七	一九・八	三二・二	

公臣殷D	四三	西周後期	一六	一九・八	三・五	
卣鼎	一	西周後期	四五	四〇・三	二〇・五	
廟屠鼎	一二	西周後期	四三	四二	一六・七	
善夫伯辛父鼎	一六	西周後期	一九・二	一九・六	二	
仲彥父鼎	一七	西周後期	二八・八	三〇	五三・五	
善夫旅伯鼎	二一	西周後期	三五・五	三四	一一・二五	
爰有嗣胥鬲	一二	西周後期	一一・二	一六・三	一・三	
成伯孫父鬲	一六	西周後期	一一・三	一六・四	一〇・五	
旅仲殷	一七	西周後期	一九・一	一九・六	四・一五	
仲南父壺A	一六	西周後期	五四・五	一五・六	一四・四五	
仲南父壺B	一六	西周後期	五三・八	一五・六	一三・七五	
重環紋鼎A	一	西周後期	三〇・五	三〇・五	五	
重環紋鼎B	一	西周後期	二三	二五	二・七五	
竊曲紋鼎	一	西周後期	二五	二七・五	二・九五	
鏤空花座豆A	一	西周後期	一六・二	二四	一・八	口径は盤径
鏤空花座豆B	一	西周後期	一六	二二	二	口径は盤径
重環紋盤	一	西周後期	一一・七	三三・四	三・四五	
瓦紋盤	一	西周後期	一四・七	八・一	一・二五	

※データは全て『陝西出土商周青銅器(1)』による。

## 第一章 此鼎・此殷銘文考釈

本章では、此鼎及び此殷を対象として検討を加える。此鼎は三件、此殷は八件が出土してゐて、それらは一・二字の違いを除けば同文であり、要は、此なる人物によつて同銘器一件が作られてゐることになる。数の上では、董家村出土青銅器のほぼ3分の1を占め、一人の作器としては実は最も多いことになる。

器についての説明も含め、まずは鼎から始めたい。鼎はA・Cの三件あり、その全てについて器影と銘文の拓本が公刊資料中に示されている。しかし、器影については問題がある。即ち、三件の器影を掲げる『陝西出土商周青銅器（一）』所載の写真を見ると、一件（該書の此鼎乙）のみ紋様が異なっており、この一件は重環紋を飾っているのに対し、他の二件（該書の此鼎甲・丙）は頸部に二本の弦紋を飾っているのである。該書の説明文によれば紋様は三件とも同じで、しかもそれは「頸飾兩道弦紋。」とのことであり、そのことは最初の報告書も明記しているところであるから、一件のみ異なっているのは何らかの過ちであると見るほかない。要は、これは写真の挿入ミスであると判断される（此鼎乙の写真を見ると、恐らく善夫旅伯鼎「後述」の別角度からの写真ではないかと推される）。従つて、原報告及び『陝西出土商周青銅器（一）』という本窖藏青銅器群に関する最も基本的な公刊書においてデータが揃わない、ということになってしまつてゐる。しかし、近年少数部が印行された『周原新出金文集粹』（文雅堂、一九九八年）に此鼎二件が載せられており、銘文の拓本によれば、該書の此鼎（甲）が、『陝西出土商周青銅器（一）』の此鼎乙に当たる。そして該書には拓本とともに器影が掲げられていて、それによれば、本件も、他の二件と同じく、確かに頸部に

二本の弦紋を飾っている。こうして、此鼎三件について正しく拓本と器影が揃ったことになり、三件は紋様や基本的な器制が等しいことが確認されるのである。

但し、注意すべきは、三件のサイズが違っていることである。即ち、Aが最も大きくて通耳高四二・一センチ、口径四〇センチ、重さ一九・七五キログラム、Bが通耳高三六センチ、口径三六センチ、重さ一二・五キログラム、Cが通耳高三三センチ、口径三四センチ、重さ一〇・八キログラムというデータが示されているのである。BとCについてはあるいは明白な有意の差とは認められなくても、それら二件とAとの間の差は歴然として存在する。A↓B↓Cと均等な差をもつてサイズが小さくなっていくならば、並べた時にまだ美的であろうけれども、この不均等な差はよく意味を理解しがたいものである。

三件とも、鼎の銘文の定位置である内壁部分に銘文があるようである。布字状況が違って、AとCは一行、各行一〇字で共通であるのに対し、Bのみは一行で各行一字になっている（重文は数えない）。しかもAとCは字の配置が縦横きれいによく揃っているのに対し、Bは特に横は全く揃っておらず、字の間の距離や字のサイズにばらつきがあり雑然としている。字そのものもAとCはよく似ているが、Bはそれらとは違う印象があり、ありてい言えば下手な字である。なお、AとCはこのようによく似ていながら、先に述べたように器のサイズが違っていることを反映して、CはAよりも布字スペースが小さくなっている（拓本による比較）。

銘文はAとCが一一字、Bのみ文末の「子孫」の「孫」字に重文記号が付いて一字多い。また、Bは「用乍朕皇考癸公墜鼎」の「鼎」字が「鼎」となっている。

次に、此殷について記しておく。此殷はA、Hの八件、AとBの二件には蓋があり、残る六件は「失蓋」とされる。本窖藏は擾乱されていないから、「失われた」としてもそれは埋められる前のことになる。但し、その当たりの事情は判然としない。サイズは表1に掲げたとおりで、蓋の有無を除けばほぼ同じと見てよい。但し、重さに注目するならば、C・Dは相当に軽く、一方、Gは重い。これらは青銅器としての肉厚が異なることによるのであり、一般的には、厚いのは工人の技量が低いことを意味すると考えられるけれども、この場合については何とも言えない。

銘文は、蓋付きのAとBでは蓋と器身の両方にあり、C、Hの六件は器身にあり、合計一〇銘が存在する。原報告と『陝西出土商周青銅器（一）』は蓋銘を掲げておらず、『殷周金文集成』に至って初めて全一〇銘が揃った。器影は全て『陝西出土商周青銅器（一）』に見えている（但し、細部がやや見えづらく、余りよい写真ではない）。頸部に重環紋、腹部に瓦紋を飾り、蓋も重環紋と瓦紋とを飾る。西周後期にありふれた形・紋様の殷である。銘文は鼎と同じで（罍鼎を罍殷にするのが違う）、基本的に一二字であるけれども、若干の抜けがある場合もある（Dは文末の「子」に重文がない。Hは「享」「用」「其」の三字を脱する）。また、DとEの二件のみは、祖先銘が違っていて「阜考朱癸」になっている。文字は一〇銘を通じていずれも悪い（下手）と言わざるを得ない。特にA・Bの蓋銘、C・Dは極めて悪く、行や列も揃わない。ほとんど偽作の字と見まごうばかりの下手さ加減である。例えばCでは、一行目「既生霸」の「生」の字が上下ひっくりかえる（松丸道雄氏の言うOp-Reverse）といった例すら見えている。字を知らぬ人間が関与していることが予想されよう。字が比較的ましなのはF・G・Hで、これらにおいては行や列も揃っている。それでもそれらもよいとまでは言えない程度である（なお、これらましのものがいずれも「失蓋」であり、一方蓋付きのものがいずれも出来が悪いという点は、あるいは注意すべきかもしれない）。

それでは以下に、此鼎と此殷の共通の楷釈と釈文・大意を掲げておく。右に記したような若干の字句の異同は○で示した。

〔此鼎・此殷 楷釈〕

作十又七年十又二月既生霸乙卯、王才周康宮辟宮、旦、王各大室、即立、嗣土毛叔右此入門、立中廷、王乎史蓼册令此曰、旅邑人・善夫、易女玄衣・黼屯・赤市・朱黃・纁旂、此敢對揚天子不顯休令、用乍朕皇考癸公（朱癸）罍鼎（殷）、用享孝于文申、用句眉壽、此其萬年無疆、峻臣天子靈冬、子子孫（孫）、永寶用。

〔此鼎・此殷 読み下し〕

惟れ十又七年、十又二月、既生霸、乙卯。王、周の康宮の辟宮に在り。旦に、王、大室に格り、位に即く。嗣土毛叔、此を右けて門に入り、中廷に立つ。王、史蓼を呼びて此に册命せしめて曰く、「邑人と善夫を旅めよ。汝に玄衣・黼純・赤市・朱黃・纁旂を賜ふ」と。此、敢て天子の不顯なる休命に對揚して、用て朕が皇考癸公（朱癸）の罍鼎（殷）を作り、用て文神に享孝し、用て眉壽<sup>もと</sup>を句む。此、其れ萬年無疆にして、峻く天子に臣へ、靈終ならんことを。子子孫（孫）、永く寶用せむ。



「此鼎・此殷 大意」

（王の即位）十七年の十二月、（月相は）既生霸、乙卯の日のこと。王は周の康宮の僻宮におられ、早朝に、王は大室へと出向き、（所定の）席に着いた。嗣土の職にある毛叔が此の右者（補佐）となって門に入り、（両名は）中廷に立った。王は、史寥を呼んで、此に対し次のように冊命の文を読んで聞かせた。「邑人と善夫の取り仕切りを命ずる。そなたに玄衣・黼純・赤市・朱黄・纁旂を授けよう。」と。「王からのこの冊命に対し」此は、「天子様からの命を畏しこみ、また賜り物にも感謝し、私の皇考なる癸公（朱癸）を祀るための鼎（殷）を作り、靈前に供え、長寿を祈りたく存じます。私は萬年までも末長く限りなく、天子様にお仕えしたく存じます。子子孫孫までも、「名譽の」この器を宝として用いる所存であります。」と申し述べた。

銘文をこのように読むことについてはほぼ問題はあるまい。西周中期以降によく見られる冊命金文であり、ここでも周王が此に対して冊命したものであることは明らかである。以下に、本銘の中で注意すべき点について若干説明を加えておく。

まず本器の時代についての説を見ておこう。本器には「隹十又七年十又二月既生霸乙卯」との紀年・日辰が記されている。この王について、平勢隆郎氏は懿王、白川静氏と『商周青銅器銘文選』は厲王、原報告・夏含夷氏は宣王であるとする。いずれも、自らの設定した暦に基づいての説である。器から見る限り本器は西周後期に属することは疑い無く、平勢氏の懿王説は、現在の常識における器から見た断代としては早すぎると言わざるを得ない。他の厲王な

いし宣王とする説については、結局は諸家の暦の精度如何ということになり、私としては判断の能力を持たない。各王に限定しようとしても、厲・宣いずれとも決定しかねるので、西周後期、それも比較の後の方、というくらいに判断に止めておきたい。むしろ注目すべきは、最近紹介された呉虎鼎の紀年との関係である。以下、あらためて触れておこう。

本器の銘文冒頭で「王、周の康宮の僻宮に在り」と言う。この「周康宮僻宮」は本器に初めて見たものである。その後、一九九二年に陝西省長安県申店郷徐家寨村から出土した呉虎鼎にも同じく「王、周の康宮の僻宮に在り」の句がある。<sup>(2)</sup> 呉虎鼎は「十又八年三月既生霸内戊」の日辰があり、本器の翌年に当たり（四カ月後）、宣王期の器とする説が有力である。比較的短い期間で干支の突き合わせが可能であるので、両器の日辰が合えば、両器は同じ王の時期のものであると見てよいであろう。ひとまず、宣王説に従っておく。それで特に問題は生じない。なお、隣攸从鼎に「周康宮僻大室」なる語が見えており、「周康宮僻宮」があつてさらに「周康宮僻大室」が別にあつたとも考えにくいから、あるいは同じ場所を指しているのであろう。隣攸从鼎は、比較的深めの西周後期の器であり、殊に此鼎とは形状に近い。同じ頃の作器と見てよいであろう。

本器に「嗣土毛叔」として現れる毛叔は、周王に仕えるもので、ここでは冊命の右者である。<sup>(3)</sup> 本器の時代と重なる西周後期において「毛」の家と言え、西周金文中最長の銘文を持つ毛公鼎が想起される。毛公鼎は宣王期の器であると考えられ、毛公が王から官僚たちの統括を命じられ、それとともに多数の賜与があつたことを記す。毛公が王から命じられた内容は、周邦・周室をよく治め、あらゆる政務に関わることに、当時の官制の柱である卿事寮・大史寮をはじめとして、軍事も含めた数多の官を統括すること、であり、この人物が執政官として最高の地位にあつたことが

わかる。時代から言つて、この毛公の毛家と本器の嗣土毛叔とが全く無関係であるとは考えがたいように思う。この毛叔自身、朝廷にあつて王に仕え、嗣土の官にあるのであるから、勢威のある人物と見ねばならない。毛の一族であること（毛公鼎の毛公その人ということはあるまい）がそれに影響している<sup>(4)</sup>と見るのが自然ではあるまいか。その毛叔が冊命の右者として現れているということは、此の立場がいかなるものであつたかを知る手掛かりの一つであらう。王による冊命は、史寥が代読している。この史寥なる人物は、無東鼎の銘文にも見えている人物であり、そこでは冊命の右者として役割を果たしている。西周後期に周王朝において地歩を築いていた人物なのであらう。

冊命の内容は「邑人と善夫を旅めよ（邑人と善夫の取り仕切りを命ずる）」というものである。読み方について異論があるとすればこの箇所であらう。即ち、「邑人善夫」は「邑人と善夫」であるのか、あるいは「邑人の善夫」であるのか、という二通りの読み方が可能であるからである。<sup>(6)</sup>この点については、松井嘉徳氏の考察があり、金文中の他の用例を比較検討した結果、「邑人と善夫」の可能性を否定し、「邑人善夫」の「邑人」は「善夫の職掌範囲を示す語」として理解すべきであらうと考えられる<sup>(7)</sup>とし、「邑人」とは一種的身分的集団あるいは出自・所屬などを示す語彙として機能することがある、との考えを示している。金文中の邑人の用例を集め、形式及び内容から総合的に考察したものであるけれども、必ずしもその結論には同意できない。

例えば、邑人について「邑人—官名」の例を集め、邑人虎臣（師西殷）・邑人先虎臣（詢殷）・邑人師氏（師癸殷）・邑人善夫（此鼎）の例を掲げつつ、邑人虎臣の例と、邑人善夫の例とは同じようには解釈できないとする。即ち、邑人虎臣については「邑人によって構成された親衛部隊」の意味に解することができるが、邑人善夫については「邑人によって構成された善夫たち」とは解釈できない、なぜならそれは、善夫は王命の出入を担当する官であり、「それが

『邑』人によって構成された団体であつたとは考え難い<sup>(8)</sup>から、とするのである。しかし、邑人善夫を「邑人によって構成された善夫たち」と解釈したにせよ、何もそれは王朝の善夫が全て邑人によって構成されたものということを前提にすることにはならない。出自が異なる善夫の中の邑人の者、ということと別に構わないはずである。それゆえ、邑人善夫も邑人虎臣などの例と同様に検討する必要がある。

これら「邑人―官名」の例を集めながら、どういうわけか松井氏が重視しない点がある。即ち、「邑人の」という意味に解して邑人虎臣・邑人先虎臣・邑人師氏・邑人善夫というようにもし並べた場合、虎臣から師氏・善夫までにも関わっているよほど大きな存在として邑人（ないし邑）を見なければならなくなってくる、ということである。即ち、虎臣では他に「某虎臣」というものは無東鼎の「官司王退側虎臣」くらいであり、師氏でも象弣卣の「成周師氏」だけであつて、松井氏のように解するならば、虎臣から師氏・善夫までにも冠される「邑人（邑）」とは、よほど特別なものであるとして考えざるを得ないのである。しかし、少なくとも、西周中期から後期に、その条件にかなうような「邑人（邑）」はない、と言わざるを得ない（<sup>(9)</sup>）。もしも西周前期であれば、新邑即ち成周があり得るが。その意味からは「邑人の」という意味に解して「邑人虎臣」・「邑人先虎臣」・「邑人師氏」・「邑人善夫」というように見ることそれ自体が極めて疑わしいということがわかるのである。例えば師氏を例にとつて「某―師氏」で見ると、金文には、「成周師氏」（象弣卣）のような例があり、これが「成周の師氏」であることは確実であるが、一方、「有司師氏」（弣斂）は「有司と師氏」の意味に取るほかはなく、この両用例を形式的に同じであると見たところで、そこからは「邑人師氏」（師癘斂）をどう読むかは決定できない、ということになってしまう。要は、一見「邑人―官名」として見れそうな構成であつても、それを「邑人によって構成された」とあるいは「邑人を管轄する」とのいずれの意味に

とうとうとも、結局それでは問題は解決せず、そもそも上記の語を「邑人—官名」という構成をとるまゝ、<sup>（一）</sup>として、見ることそれ自体に問題がある、<sup>（二）</sup>と言いつけるのである。

上掲の邑人虎臣（師酉毀）・邑人先虎臣（詢毀）・邑人師氏（師痕毀）といった例では、虎臣も師氏も、金文では特にその語の直前に何も冠せずに見れることがあり、そもそも要は「虎臣」「師氏」という独立した存在である。それ故、「邑人と虎臣」「邑人と師氏」というように解して問題はない。善夫も同様であり、此鼎の「邑人善夫」も「邑人と善夫」というように解して問題はないと考える。<sup>（三）</sup>「邑人の」と解した場合には（出自であれ対象であれ）、金文の他の用例との整合性からむしろ不都合が生じるので、そのようには解さないのが無難である、と判断する。

この窖藏からは、善夫の作器が、善夫旅伯鼎と善夫伯辛父鼎の二件出土しており、しかも善夫旅伯鼎には被祭者として毛中姫の名が現れている。これらの善夫こそ此が旅めることとなった善夫である可能性は強いと思われるし、善夫旅伯鼎の毛中姫はあるいは本器の冊命の右者の毛叔と何らかの關係を持つことが予想されよう。そうすると、此は、毛叔やその一族の者との結び付きを柱に周王とつながっている（いった）ものと見ることができると、任命された職務の重さよりも、王から冊命を受けたということそのこと自体が、此にとっては大きな意味を持っていたのではないかと考えられる。

1 本器群については、次に示す論文を主に参考とした。

夏含夷「此鼎銘文与西周晚期年代考」『大陸雜誌』第八十卷第六期、一九九〇年  
のち朱鳳瀚・張榮明編『西周諸王年代研究』貴州人民出版社、一九九八年、に収む

劉士莪「周原青銅器中所見的世官世族」

『周秦文化研究』編委會編『周秦文化研究』陝西人民出版社、一九九八年

曹瑋「周代善夫職官考辨」陝西歷史博物館編『西周史論文集 上』陝西人民出版社、一九九三年

白川靜『金文通釈』補釈篇、補一一、一九七七年

平勢隆郎『中国古代紀年の研究』汲古書院、一九九六年

2 穆曉軍「陝西長安吳出士吳虎鼎」、張培瑜・周曉陸「吳虎鼎銘紀時討論」、編集部「吳虎鼎銘座談紀要」、李學勤「吳虎鼎考釈」、以上いずれも『考古与文物』一九九八年第三期。

3 なお、毛叔には自ら作器した器がある（毛叔盤）。『三代吉金文存』十七・十一（一）。但しそれは春秋に下るものと思われ、本器とは無関係と見られる。

4 冊命の「右者」と冊命される者との関係については、従来、右者が冊命される者よりも身分的に上の者というように言われてきた。例えば、白川静氏は「受命者の官職の系統によって、その正長たる執政が右者となったものと思われる。」（『金文通釈』西周史略、第四章 政治的秩序の成立）と言ひ、楊寛氏もほぼ同様の見解である（『西周王朝公卿の官爵制度』『西周史研究（人文雑誌叢刊第二輯）』一九八四年）。但し、これに異を唱えたのが汪中文氏である（『西周冊命金文所見官制研究』國立編訳館、一九九九年）。汪氏の考察の結論は、右者と冊命される者との関係はさまざま場合があり得、必ずしも上下の統属関係があるとは限らない、というものである。関係金文の検討によれば汪氏の言うところもつともものようでもあるけれども、氏の考察では、金文に見える官職について、例えば王の下にも諸侯の下にも同名のものが存在したというようなことが配慮されていないように見られ、汪氏の結論をそのまま受け入れるには躊躇せざるを得ない。

5 無東鼎において従来「史蓼」と釈されて来た部分は字が不審で、特に「史」字は別字とも見える。但し、無東鼎は全般的に字が悪いので、厳密に見るほどのこともないのかもしれない。ひとまず、従来の説に従う。

6 なお、朱鳳瀚氏は「旅邑人善夫」を冊命の内容と見ず、「銘文記王冊命此時称此為『旅邑人善夫』、旅邑当是此的采邑、而其官任王朝善夫。」と言う（『商周家族形態研究』天津古籍出版社、一九九〇年、三七七頁）。朱氏は、「旅邑人善夫」を此その人への呼びかけの語とし、「旅の邑の人にして善夫よ。」と読んでるのである。そうすると、この銘文は冊命の内容がな  
いことになる。冊命金文にそういう例は見当たらない（袁盤が唯一の例）。さらに朱氏は、この窖藏から出土した善夫旅伯  
鼎と善夫伯辛父鼎の作者者である旅伯と伯辛父も此のことである、という。ずいぶんと無茶な説、と言うほかはない。但し、  
この旅伯・伯辛父・此を同一人とする説は、既に周瑗「矩伯・裘衛両家族の消長与周礼的崩壞」（『文物』一九七六年第六期）  
が主張するところでもある。即ち「旅伯・此・伯辛父的官職都是膳夫、其实是一個人。古人的名・字含義是相呼应的。」（四  
六頁）と言っているのである。しかし、一人とする理由は名と字の呼応というところだけであり、なおかつ、此は「邑人善  
夫を旅めよ」と命じられたのであって、「邑人」善夫になれ」と命じられたのではない。その点、周瑗氏の言うところはや  
はり誤りであろうと思う（なお、この周瑗とは実は李学勤氏であり、該文は、氏の『新出青銅器研究』文物出版社、一九九  
〇年、に「試論董家村青銅器群」として収められている。見解に変化はない）。

7 松井「西周期鄭（奠）の考察」（『史林』六九卷四号、一九八六年）及び「邑人考」（永山英正代表『中国出土文字資料の  
基礎的研究』平成四年度科学研究費報告）。

8 松井「西周期鄭（奠）の考察」二九～三〇頁。

9 有司と師氏が別物であることは、「王射、有司眾師氏小子卿射（王、射す。有司と師氏・小子、会射す。）」（令鼎）に明ら  
かである。

10 宋刻の師晨鼎には「冊命師晨足師俗司□人（師晨に冊命するに師俗を足け□人を司めよ）」の句があり、この「□人」の  
「□」は字の上半分の「口（くち）」だけが残っていて、これを「邑」と見る説もある（陳夢家『西周銅器斷代（上）』、『商  
周青銅器銘文選（三）』）。それが正しければ（可能性は大きいと思う）、師晨鼎は、「邑人」がそれ自身単独でおさめること

を命じられることもあったことを示す例となる。

## 第二章 公臣殷銘文考釈

続いて本章では公臣殷を対象とする。<sup>(1)</sup> 公臣殷は同銘四件があり、うち二件は有蓋、二件は「失蓋」であり、銘文は器身にのみあるらしく、有蓋二件についても銘拓は器身のものしか示されない。

有蓋のAは通高二〇・八センチ、口径一九・五センチ、重さ四・四キロ、同じくBは通高一・五センチ、口径二〇センチ、重さ四・三キロであり、「失蓋」のCは通高一五・七センチ、口径一九・八センチ、重さ三・二キロ、同じくDは通高一六センチ、口径一九・八センチ、重さ三・五キロであるという。いずれも頸部に竊曲紋、腹部に瓦紋を飾り（有蓋の場合には蓋も同様）、左右の耳には環がつく。蓋の有無を別にすれば、同銘四件のセットであることは疑いがない。

銘文は六行で、一～五行目までは各行七字、六行目だけが八字の計四三字からなり、布字は四銘とも同じである。

### 「公臣殷・楷釈」

莽中令公臣、嗣朕百工、易女馬乘・鐘五・金、用事。公臣拜頤首、敢揚天尹不顯休、用乍埒殷、公臣其萬年、用寶茲休。



「公臣殷・読み下し」

彝仲、公臣に令し、「朕が百工を嗣<sup>つぎ</sup>めよ。汝に馬乗・鐘五・金を錫ふ。用て事へよ。」と。公臣、拜稽首し、敢て天尹の丕顯なる休に對揚し、用て隣殷を作る。公臣、其れ萬年、用てこの休を寶（保）たん。

「公臣殷・大意」

彝仲が公臣に（次のように）令を下した。「私の下にいる百工を管理せよ。そなたに馬乗（Ⅱ四頭）・鐘五・金（Ⅱ銅地金）を授ける。よくよく仕えるように。」と。公臣は畏まって拝礼し（次のように申し上げ）た。「天尹様よりのありがたき賜り物に感謝し、（記念して）宝器を作りたく存じます。私公臣は、萬年までも木長く、この賜り物を宝といたしたく存じます。」と。

四件同銘ながら、一カ所、ABC3件で「天尹」となっているものがDでは「天君」になっているところが違っている。尹に口がつけば君になるだけの違いであり、あるいは君が正しくて、尹は口が欠けたないし拓本に不鮮明なだけかとも見られようが、拓本による限りABC3件では口のかけらも見えず、また口が入りそうなスペースもなく、やはり尹と書くこうとして尹と書いたとしか思われない。Dのみが、理由は不明ながら、天君となっているということを、ひとまずは確認しておくにとどめよう（意味については後述）。それ以外は布字も字様も共通である。

銘文は、諸侯による陪臣への冊命であり、莒仲が公臣に対して命令と賜与物を下し、公臣がそれに応えたことを記すものである。莒仲は他の銘文にも見えており、彼自身の作器した例もある。即ち、莒仲盥では莒仲は王（周王であらう）とともに南征し、成周において王からの賜与を受けたことを記している。また、何殷では、冊命の右者としてその名が見えている。莒仲という人物自身が王朝における重要人物であったことは疑いない。そのみならず、西周後期金文には、この莒の一族の者がよく見えているのである。

本器の銘文によれば、莒仲は自らの元に百工を抱えていたことがわかる。<sup>(2)</sup> 賜与物は馬乗即ち馬四頭、鐘五、金即ち銅地金というもので、金の量が不明ながら、それでも決して軽い賜与ではない。また、当時の価値観から言えば、むしろ使いでのあるものが与えられているという印象である。例えば、周王からの冊命の際でも、賜与されるものはたかだか馬車具といった例もある。<sup>(3)</sup> 臣下にくつした賜与物を与えていることも、莒仲の勢威の表れと見ることできよ<sup>(4)</sup>。公臣という名は金文に初出である。本器の出土から二年後に、王臣なる者が作器した青銅器が陝西省澄城縣城郊郷串業村から出土している。<sup>(5)</sup> これらの例は、その字面から「公の臣」「王の臣」と読み得るし、それで銘文の言う状況にいかにも当てはまるものでもあるけれども、金文の通例からすれば、公臣・王臣ともに特定個人を指す固有名詞であると見るべきであって、それ以上の深い意味を探らない方がよからう。

公臣は、莒仲のことを天尹（天君）と称している。西周金文には、唯一例ながら、陪臣が主君たる諸侯を「天子」と称している例（獻殷）もあり、当時においては、頂点に立つのが周上であつたにせよ、「天」の語は周王にだけ用いられたというものではなかった。とはいえ、西周前期の重要人物に対する皇天尹太保（令彝）の呼称もあり、軽々に用いる語でもない。莒仲は莒の一族の者であらう。莒氏は作器数も多く、西周時代の屈指の有力な一族である。『史記』

周本紀には宣王期の人物として莒文公が登場しており、賈逵の注には「文公、文王母弟莒仲之後、為王卿士也。」とある。この注によれば、莒は周の一族ということになる。莒については文献においても東西南北及び小莒の計五莒が見え、その地望から実態まで、不明の部分が<sup>6)</sup>多い。今後の検討に待つところが多いとはいえ、公臣が、当時の権勢家の莒氏の莒仲の臣であることは本器の銘文から確実であり、その線につながることをまずは確認しておこう。銘文は、莒仲が公臣に「朕が百工を嗣めよ。」と命じたものであるから、公臣はまさに莒仲その人の臣であり、まさにその家の任務を命じられたものである。朝廷の官職に関わっての上下の僚属関係ではない。私的な結び付きであることに注目せねばなるまい。

1 本器に関しては、以下の論文を参考とした。

劉啓益「西周厲王時期銅器補記」

劉士莪「周原青銅器中所見的世官世族」

ともに『周秦文化研究』編委會編『周秦文化研究』陝西人民出版社、一九九八年

趙世綱「莒国青銅器与莒国墓地的年代問題」河南省文物考古学会編『河南文物考古論集』河南人民出版社、一九九六年  
蔡運章「論莒仲其人」『中原文物』一九九四年第二期

2 同様な例に孟賁がある（中国科学院考古研究所『長安張家坡西周銅器群』文物出版社、一九六五年）。その銘文には、孟の父が毛公から賜与を受けたことを記し、「毛公、朕が文考に臣を賜ふに厥の工よりす。」とある。毛公が自ら工を抱えていたこと（しかもその一部を賜与し得るほどであったこと）がわかる。なお、その人物が「毛公」即ち毛の一族の者であることに注意されたい。やはりその族が有力であることを示す証拠である（第一章参照）。

3 例えば師殯設では賜与物は金勒だけである。林已奈夫氏によると、金勒の勒とは、「馬の頭にかける御馬に必要な馬具全体の称」であり、金勒とは「青銅金具で飾った勒」という意味である（林「西周金文に現れる車馬関係語彙」『甲骨学』第十一号、一九七六年）。物の価値は何も大小や数で決まるものではないといえ、賜与が金勒のみというのは相当に軽いと言わねばならない。林氏が指摘しているように、攸勒だけではなく馬も同時に賜与されている例があるからである。したがって、師殯設の場合では、王からの賜与ではあるけれども、やはりそれは王や師殯の勢威を示すものとは見られない。

4 葵仲が作器者の葵仲盥は「葵仲以王南征、伐南淮夷。」という文で始まる。「葵仲、王と以に南征し、南淮夷を伐つ。」というように、葵仲と王とが並んで主語となり、しかも葵仲を前面に立てた文となっている。西周前期の器では、「過伯、王の、反する刑を伐つに従う。」（過伯設）あるいは「壘、王の刑を伐つに従う。」（壘設）というように、作器者を前面に出しても「某が王に従う」という形で作文する。そうした例と比較するならば、葵仲盥の「葵仲、王と以に南征し」という文が、いかに葵仲の勢威を示すものであるか、うかがい知ることができよう。但し、それは、葵仲一人の勢威というにとどまらず、西周後期における全体的な臣権の伸長を意味するものであろう。

5 吳鎮烽・王東海「王臣簋の出土と相關銅器的時代」『文物』一九八〇年第五期。

6 葵については、松井嘉徳「西周期鄭（奠）の考察」『史林』六九卷四号、一九八六年）に關係金文が集成されている。また、許永生「從葵国墓地考古新發現談葵国歴史概況」『華夏考古』一九九三年第四期）、趙世綱「葵国青銅器与葵国墓地的年代問題」『河南文物考古論集』、蔡運章「論葵仲其人」『中原文物』一九九四年第二期）同「葵文公墓考」『中原文物』一九九四年第三期）同「葵国的分封与五个葵国的歷史糾葛」『中原文物』一九九六年第二期）同「西葵史迹及相關問題」『洛陽考古發現与研究（中原文物特刊）』一九九六年。以上、蔡運章氏の論文は全て氏の著『甲骨文与古史新探』に収められている）、などの研究も参照のこと。最近、西周時代後期に属する河南省三门峡市の葵国墓地に關する報告書が出た。今後の詳細な分析に期待したい（河南省文物考古研究所・三门峡市文物工作隊『三门峡葵国墓』文物出版社、一九九九年）。

### 第三章　その他の諸器について

本章では、旧稿も含めてここまで扱ってこなかった器一七件についてまとめて述べる。これら一七件は、器形からいずれも西周後期に属する器であると判断される。また、これらの内、銘文をもつものは一〇件、もたないものは七件あり、まずこの銘文の有無によって区別をする。銘文をもつものについては、まず器種ごとに分け、その上で銘文の長さを基準として短いものから説明を加えていくこととする。一方、銘文をもたないものについては、器種ごとに分け、一般の青銅器・金文著録の配列に従って並べていくこととする。なお、以下では、銘文は短いものばかりであり、読み下し部分によって内容はほぼ把握できるので、これまでとは違い大意は示さない。

#### ◎ 亜鼎

##### 〔亜鼎・銘文〕

##### （図象銘）

通高四五センチ、口径四〇・三センチ、重さ二〇・五キロのやや大型の鼎である。やや浅めながら、下腹の出た堂々たる造形である。

その銘文を「亜」字であるときみなして亜鼎と称しているけれども、二重になったこの形は文字としての亜ではなく、いわゆる図象銘と見るべきである。よって、正しくは亜鼎と称すべきではないが、混乱を避け、ひとまず従来の著録

に従っておく。器は間違いなく西周時代後期に属し、図象銘としては極めて遅い時代の例ということになる。

◎廟辱鼎

〔廟辱鼎・楷釈〕

廟辱乍鼎、其子孫、永寶用。

〔廟辱鼎・読み下し〕

廟辱、鼎を作る。其れ子子孫孫まで永く寶用せむ。

通高四三センチ、口径四二センチ、重さ一六・七キロの器で、頸部に重環紋と弦紋とを飾る。ごく普通の西周後期の鼎である。

銘文の内容は、廟辱なる人物が鼎を作った、というだけのものである。廟辱という人物については何一つ情報は無い。本窖蔵から出土した青銅器中に別の呼び名で現れているかどうか不明である。

◎善夫伯辛父鼎

〔善夫伯辛父鼎・楷釈〕

善夫白辛父乍罍鼎。其萬年、子孫永寶用。

〔善夫伯辛父鼎・読み下し〕

善夫伯辛父、罍鼎を作る。其れ萬年、子子孫孫までも永く寶用せむ。

通高一九・一センチ、口径一九・六センチ、重さ二キロの器で、鼎としてはやや小さい部類に属する。頸部に重環紋と弦紋とを飾る、ごく普通の西周後期の鼎である。

銘文の内容は、善夫である伯辛父が罍鼎を作った、というだけのものである。この善夫伯辛父と後述の善夫旅伯とを同一人物とする説もあるけれども、必ずしもそのように見る必要はないと思う。

#### ◎仲涿父鼎

##### 〔仲涿父鼎・楷釈〕

中涿父乍罍鼎、其萬年、子子孫孫、永寶、用享。

##### 〔仲涿父鼎・読み下し〕

中涿父、罍鼎を作る。其れ萬年、子子孫孫までも永く寶とし、用て享せむ。

通高二八・八センチ、口径三〇センチ、重さ五・三五キロの器で、頸部に弦紋二本を飾る、ごくシンプルな、至って普通の西周後期の鼎である。

銘文の内容は、中涿父なる人物が罍鼎を作った、というだけのものである。中涿父なる人物は本器に初見で、どういふ身分・立場かはわからない。涿の字は、日と乙に従う大変珍しい形に書かれている。

◎善夫旅伯鼎

〔善夫旅伯鼎・楷釈〕

善夫旅伯乍毛中姬罍鼎。其萬年、子孫、永寶用享。

〔善夫旅伯鼎・読み下し〕

善夫旅伯、毛中姬の罍鼎を作る。其れ萬年、子子孫孫まで、永く寶とし、用つて享せむ。

通高三五・五センチ、口径三四センチ、重さ一一・二五キロの器で、頸部に重環紋と弦紋とを飾る。ごく一般的な西周後期の鼎である。

銘文の内容は、善夫である旅伯が、その母であろう毛中姫を祀るための罍鼎を作った、というものである。後述の旅中とは兄弟であろうか。毛中姫という言い方は珍しい。毛中の配偶者をその出身の姓を付して毛中姫と呼んだのであろうか。西周後期の蓼生盥に「蓼生眾大嬭、其百男百女千孫、…」の句があり、「大嬭」は「蓼生」の配偶者にして女性である。この例を参考とすると、毛中姫は「毛中+姫」ではなく「毛+中姫」であるかもしれない。いずれであっても、毛中姫が姫姓の出で毛の族に関わる人間であることには変わりはない。

◎雙有嗣卣

〔雙有嗣卣・楷釈〕

雙又嗣卣乍齋鬲。用朕羸韃母。



「𡗗有嗣再鬲・読み下し」

𡗗の有嗣なる再、甗鬲を作る。用つて甗鬲母に朕（朕）せよ。

通高一・二センチ、口径一六・三センチ、重さ一・三キロの器で、肩部に重環紋を、腹から足にかけて直線紋を飾る。口沿部は内側から外へ向かつて折れ、平たい帯状を呈する。銘文は口部内壁に入れられている。ごく一般的な西周後期の甗である。

本器については、従来指摘されるように、ほぼ同銘の鼎が陝西省岐山県賀家村から出土していることが注目される（陝西省博物館・陝西省文物管理委员会「陝西岐山賀家村西周墓葬」『考古』一九七六年第一期）。その鼎は墓葬（3号墓）からの出土であり（残念なことに盗掘済み）、窖藏ではない。同じ墓葬からは「白車父作旅盥。其萬年永寶用（伯車父、旅盥を作る。其れ萬年までも永く寶用せん）。」という銘文を持つ盥が二件出土している。<sup>1</sup> 𡗗有嗣再鬲も同銘の鼎も、文の内容は𡗗の有嗣なる再が婚禮用の器を作ったことを言うものであるから、異なる地点から出土してもそのことには特別不審な点はない。<sup>2</sup> 𡗗の有嗣である再なる人物が、通婚関係を通じて周辺の者と結び付いていたことを示すものである（あるいは逆に、周辺の者が、婚姻を通して𡗗の有嗣である再と、あるいは𡗗の族と関係を深めようとしたことを示すものである）。賀家村と董家村との距離は、直線距離にしては六〇〇―七〇〇メートルほどでしかなく、極めて近いと言つてよい。これら鼎と鬲に関係する人々が没交渉であつたとは、まず考えがたいであろう（但し、その状況はわからない）。なお、この鬲はごく普通の作風であるけれども、賀家村出土の鼎は全体に小ぶりであり、流の付く小ささか珍しいものである。その鼎とこの鬲とはセットにはなり得ない。同時の作ではないかもしれない。

い。

1 散伯車父という人物の作になる鼎四件が陝西省扶風県召陳村から出土している(『陝西出土商周青銅器』(二) 一一三—一六)。同出器には散車父の作の器が七件(殷五件、壺一件)あり、散伯車父と散車父は、金文の通例から言えば同一人物であり、散伯車父はまた伯車父とも呼ばれ得る(松井嘉徳「仲山父の時代」『東洋史研究』第五七卷第四号、一九九九年)。賀家村から召陳村は直線距離にしてほぼ二・五キロほどで、これも近いと言つてよい。伯車父の作の旅盥が賀家村から出土したことは、伯車父自身が賀家村方面に出向いていたことを示すものであろうか。散伯車父鼎は、紋様は後述の竊曲紋鼎に、器型は前述の亜鼎に似る。同時期の作であることは疑い無く、あるいは何か関連を有するものであるかもしれない。なお、召陳村は例の西周宮室遺址が発見された場所である。

2 本器が陝西省岐山県董家村から出土し、ほぼ同銘の鼎が陝西省岐山県賀家村から出土していることから、王輝氏は董家村から賀家村にかけての小範圍に𡈼国家族の采邑があつたかもしれない、と考えている(王「西周畿内地名小考」『考古与文物』一九八五年第三期)。しかし、これらの器は、𡈼の有嗣なる再が婚礼用に作つたいわゆる媵器であるから、その出土地点がそのまま「𡈼国家族の采邑」ということにはなり得ない。

### ◎成伯孫父鬲

〔成伯孫父鬲・楷枳〕

成白孫父乍浸羸罍鬲。子孫、永寶用。

〔成伯孫父鬲・読み下し〕

成伯孫父、浸羸の罍（1）を作る。子子孫孫までも、永く實用せむ。

通高一・三センチ、口径一六・四センチ、重さ一・〇五キロの器で、肩部に重環紋を、腹から足にかけて直線紋を飾る。口沿部は内側から外へ向かって折れ、平たい帯状を呈し、銘文はそこに入れられている。ごく普通の西周後期の罍である。<sup>（1）</sup>

銘文は、成伯孫父なる人物が浸羸の罍（1）を作ったことを言う。成伯孫父は「成の伯孫父」であり、原報告及び『陝西出土商周青銅器（一）』は、この成を文献に見える邲であるとし、邲は周武王の弟である叔武の封国であり、孫父は叔武の後裔であろうと言う。文献に言う邲の地望は山東省であり、<sup>（2）</sup>いかにも遠い。原報告は、本器が岐山から出土したことにより、邲はもとと畿内に居り、平王の東遷後に山東へ移ったとするけれども、それは両者を同じと見なしてつじつまを合わせようとすればそうなる、というだけのこと、それでよいかどうか疑問である。「浸羸の罍（1）」という浸羸については不明。原報告及び『陝西出土商周青銅器（一）』は、浸羸を作器者成伯孫父の亡妻とするけれども、成伯孫父の母に当たる人物かもしれない。<sup>（3）</sup>成伯孫父が、本窖蔵の他の青銅器群に現れる人々とどういう関係にあるかは、材料がなく不明とせざるを得ない。しかし、先には疑問としておいたものの、もし成が邲で周の一族であるならば、本窖蔵中、毛や莽などやはり周の一族の名が見えていることと併せ、考える材料にはなる。

1 『中国陝西省宝鸡市周原文物展』（岐阜市歴史博物館、一九八八年）の18番目の器として一九七二年に岐山県京当郷喬家村から出土したという「環帯紋罍」が掲げられている。ところが、解説の文と写真や拓本とがさっぱり合わない。写真と拓

本を見れば、実はその器はまぎれもない成伯孫父鬲である。私はこの展覧会そのものは見ていないので、実際に日本に来たのがどちらであったのかは知らないけれども、少なくともこの図録に誤りがあることは明らかである。とはいえ、おかげで成伯孫父鬲に関する貴重な資料が増えたことにはなる。なお、一九七二年に岐山県京当郷喬家村から出土したという環帯紋鬲は、龐文龍「岐山県博物館藏商周青銅器錄遺」『考古与文物』一九九四年第三期、に載せられており、まことに劣悪な写真ながら別器であることは充分にうかがえる。また、成伯孫父鬲の同銘器が喬家村から出土した（しかも先に）という事実はないようである。

2 邨の地望については、陳槃『春秋大事表列国爵姓及存滅表譌異』を参照のこと。

3 西周金文に現れる女性の称谓については、李仲操「西周金文中的婦女称谓」『古文字研究』十八、一九九二年、及び、曹定雲「周代金文中女子称谓類型研究」『考古』一九九九年第六期、を参照のこと。

## ◎旅仲殷

〔旅仲殷・楷釈〕

旅仲乍臧寶殷。其萬年、子孫、永用享考。

〔旅仲殷・読み下し〕

旅仲、臧の寶殷を作る。其れ萬年、子子孫孫までも、永く用て享考せむ。

通高一九・一センチ、口径一九・六センチ、重さ四・一五キロの器で、頸部に重環紋を、腹部に瓦紋を飾る。ごく

普通の西周後期の殷である。「尖蓋」であるとされる。

銘文の内容は、旅仲なる人物が鍼寶殷を作った、というだけのものである。鍼字は意味未詳。これ一文字で祖先名ということではあるまい。

◎仲南父壺A・B

「仲南父壺・楷釈」

中南父乍罍。其萬年、子孫、永寶用。

「仲南父壺・読み下し」

仲南父、罍壺を作る。其れ萬年、子子孫孫までも、永く寶用せむ。

同銘・同型・同紋様の器が二件。Aは、通高五四・五センチ、口径一五・六センチ、腹深四〇・八センチ、最大腹径三二センチ、重さ一四・四五キロ。Bは、通高五三・八センチ、口径一五・六センチ、腹深四〇センチ、最大腹径三三センチ、重さ一三・七五キロ。頸部に顧鳳紋、腹部に十字型に重環紋を飾る。左右の耳には環が付く。器は大型の立派なものである。

銘文については著録で一部混乱がある。原報告及び『陝西出土商周青銅器（一）』によると、銘文は、Aは蓋と器身の内壁にあり、Bは蓋にだけある、とのことで計三銘ということになる。拓本は、原報告ではAの蓋銘のみを掲げ、『陝西出土商周青銅器（一）』はAについては蓋とも器身とも言わずに一銘を、Bについては「蓋銘文」として一銘を、

よって計二銘を掲げている。ところが、『殷周金文集成』は、計三銘を掲げつつも、Aについて一銘のみとし、Bについては蓋と器身の両銘を掲げている。<sup>(1)</sup>即ち、原報告及び『陝西出土商周青銅器(一)』とは銘の所在の仕方が違っているのである。そして、この『殷周金文集成』と同じ銘の組み合わせを示すものに、『中国陝西省宝鸡市周原文物展』(岐阜市歴史博物館、一九八八年、以下、『周原文物展』図録と呼ぶ)がある。仲南父壺が一件だけ日本で公開された時の貴重な資料であり、カラー写真が掲載されていることも貴重である。そこには銘文の拓本が掲げられており、しかもそれは原報告及び『陝西出土商周青銅器(一)』には載せられていない初出のものである。『周原文物展』図録はこの初出の拓本一銘を掲げるのみであって、拓本の組み合わせとして明確にはし得ないものの、『周原文物展』図録は掲載器のタイトルを「仲南父壺(甲)」とし、掲げるサイズは『陝西出土商周青銅器(一)』一七七(即ちA)の数字そのまま、解説にも「器の内壁と蓋の内部に各16字の銘文が見られる。」と言う。これをそのまま受け取ることが可能であればよいのだが、実は疑問がある。『周原文物展』図録の写真を子細に見るならば、その器は、『陝西出土商周青銅器(一)』の一七七ではなく、実は一七八であると判断される。<sup>(2)</sup>そうすると、サイズに関する文は合わないことになってしまふ。即ち、ここにも混乱があるのである。さらに、『陝西金文彙編』では、『陝西出土商周青銅器(一)』所載の二銘をセットとしている。混乱はますます深まるばかりである。手持ちの材料を集めて、それぞれの一致点を考えてみれば、次のような結果になると思われる。まず、『周原文物展』図録の掲載器は、写真と紋様の拓本とが符合しているので、銘文の拓も適切であると判断する。そうするとこの器は『陝西出土商周青銅器(一)』の一七八ということになる。『陝西出土商周青銅器(一)』の一七八の拓として掲げられているのは、銘文の上部が左に向かってズレている、一見してわかりやすいものであり、『殷周金文集成』もそれをその器のものとして掲げている。従って、その点も確定

する。そうすると、『陝西出土商周青銅器（二）』一七八として二銘が揃うこととなり、従って、蓋と器身の銘があるのはこちらの器の方ということになる。一方、最近もたらされた『周原新出金文集粹』に仲南父壺が一件だけ著録されており、写真によればそれは『陝西出土商周青銅器（二）』の一七七であり、銘拓もまさに一七七の銘（方格つきで二・三行め頭がやや崩れている）を掲げており、『殷周金文集成』とも一致するからこれもまた確定する。以上から考えれば、『陝西出土商周青銅器（二）』一七七の器（即ちA）は蓋にだけ有銘、一七八の器（即ちB）は蓋と器身の両方に有銘、ということになる。この結論が正しければ、『陝西出土商周青銅器（二）』は器を取り違えていることになり、しかもそれは原報告段階から既に起こっていたことになる。

銘文の内容は、仲南父なる人物が罍壺を作った、というだけのものである。作器の動機も不明であり、祖先名もここには見えていない。<sup>(3)</sup> 仲南父なる人物が、本窖藏青銅器群に現れる人物の中でどのような位置付けになるのかは、考える材料がない。

1 但し、『殷周金文集成』九六四三・二として示される拓は、裏返しである。所載の銘文は、文が左から右へと行が進み、字も反転形となっている。もしもそういう大きな違いがあるのなら、他の著録がその点を既に指摘していて当然であろう。然るに、そうした指摘はどこにも見当たらない。『殷周金文集成』の誤りであると判断する。

2 判断の理由は次の二点である。頸部の顧鳳紋を見るならば、『周原文物展』図録の器は、向かって左側の部分、鳳の尾が上に上がり切って左へ伸びていくこうとするまさにその箇所にくっきりと縦の線が入る（范の継ぎ目か）。そのことは写真でも、紋様の拓本でもはっきりと確認できる。ところが『陝西出土商周青銅器（二）』ではそれは一七八にのみ確認され、一

七七ではそれは見られないのである。また、同じく頸部の顧鳳紋について、『周原文物展』図録の器ではその向かって右側の鳳の尾の上のところにカシューナッツ形の斑が見えている。それがある器は『陝西出土商周青銅器（一）』では一七八であって、一七七ではないのである。各著録の写真は正面一方向からのもの一枚だけであり、裏側はわからないけれども、以上の二点（偶然的要素が高い）が、一七七の裏側にともに備わっている可能性は極めて低いというべきであろう。この二点から、『周原文物展』図録の器は『陝西出土商周青銅器（一）』の一七八であると判断する。

3

仲南父のような「排行」某父という形で現れる人名について検討した松井嘉徳氏は、「「排行」某父という称谓が何よりもまず、その名の記された青銅器が使用される一族の祭祀の場を念頭においたものであったことを雄弁に物語っている。」（松井「仲山父の時代」『東洋史研究』第五七巻第四号、一九九九年）と言う。氏は、仲南父のような「排行」某父という形は、本来、「一族内部の系譜的位置づけを念頭においた称谓である」（六二頁）という理解を示し、それが「同時に氏族の壁をこえた公的な場で」（同頁）も用いられるようになっていった、その過程を追究している。結論はおおむね妥当なように見えるけれども、但し、「銘文の起草者は誰か」という極めて重要な点に関しての言及がないので、実は留保すべきところが大い。例えば、氏は「自作器」という語を用いているが（四九・六〇頁）、西周金文における厳密な意味での「自作器」は「某自作」と銘文中に明言するものに限るべきであり、そしてそうした器はせいぜい十数件ほどしか存在しない、という事実がある。銘文に「某、〃を作る。」というその某を作器者と呼んだとして、しかし彼は工人ではない以上器物制作者ではないし、最も極端には製作過程のどこにも関与しない発注者に過ぎないということもある。そのように、作者者が、もとも銘文の起草にも書写にも（無論鑄造にも）関与せず、例えば青銅器は常に共通の（王室の）工房で製作され続けていたのだとすれば、松井氏の指摘も当たっていると言えよう。しかしその前提が適切であるかどうか、それこそまず第一に検討せねばならない事柄であろうと思う。加えて、「排行」某父という称谓が言わば私的な称谓であるならば、西周前期に重要人物である伯懋父がまさに「排行」某父形式の「伯懋父」としてしばしば見えているという例があり、中期以後期への変化



としては必ずしも解し得ないとも思う。それは先に言ったように、銘文の起草者の主体性の問題でもある。また、松井氏が「[排行] 某父」という称谓が、西周後期を中心として、西周中期から春秋前期にかけての時期に集中的に出現すること」を指摘しているのは、まことにその通りである。但し、氏が言及していないのは、かなり多数の「[排行] 某父」の作器は一件のみであること、逆に言えば器を一件しか持たぬ「[排行] 某父」が多数存在しているということである。かつてであれば青銅器を製作することのできなかったレベルの者が、冊命などと無関係に、自らのために製作することが可能になってきた、といったことが考えられないであろうか。要は、銘文上の称谓の変化ということではなく、むしろ青銅器製作の機会そのものの変化というより大きな転回があるいは考えられよう（こうした問題については、松丸道雄「西周青銅器製作の背景」『東京大学東洋文化研究所紀要』第七二冊、一九七七年「のち同氏編『西周青銅器とその国家』東京大学出版会、一九八〇年、に収む」、及び竹内康浩「西周中期以降における西周青銅器製作の背景」『東京大学東洋文化研究所紀要』第一二五冊、一九九四年、を参照のこと）。

銘文を持つ器は以上である。以下は、銘文を持たない器を並べておく。

### ◎重環紋鼎 甲・乙

同型が二件であるけれども、一は通高三〇・五センチ、口径三〇・五センチ、重さ五キロ、もう一は通高二三センチ、口径二五センチ、重さ二・七五キロ、というように、前者がやや大きく、後者が小さい。頸部の紋様も違いがあるが、前者は長い鱗型の連続であるのに対し、後者は長い鱗型とはば円形のものが交互に配置されたタイプである。

その意味からも、これらは同時製作のセットではなく、別な折りに作られたものであると判断される。

◎竊曲紋鼎

通高二五センチ、口径二七・五センチ、重さ二・九五キロの鼎である。頸回りに竊曲紋を、足の付け根に獸面を飾る。高さに比して口径が大きく、その分、浅めの形になっている。なお、陝西省扶風県召陳村から出土した散伯車父鼎四件が、本器とよく似た紋様を飾っている（『陝西出土商周青銅器（三）』一一三―一一六）。

◎鏤空花座豆 A・B

同型が二件、一は通高一六・二センチ、盤径二四センチ、重さ一・八キロ、一は通高一六センチ、盤径二二センチ、重さ二キロ、ということで、サイズもほぼ等しく、セットをなすものと見てよい。圈足部分が透かし彫りになっているのが特徴であるが、西周後期の例は他にも見つかっている。

◎瓦紋盤

通高一四・七センチ、口径八・一センチ、重さ一・二五キロの器で、器種について原報告及び『陝西出土商周青銅

器（一）は鑒とする。足の部分が円錐形でしかも極めて短い、珍しい形であり、陝西省長安縣張家坡から出土した青銅器に似た形のものがあり（『長安張家坡西周銅器群』図版貳參・貳肆）、その銘文に「鑒」と自銘していて、そこから本器もこのように命名したと原報告はいう。但し、その張家坡出土青銅器にかなりよく似た形の伝世品があつて、それは「盃」と自銘している（季良父盃。西清三一—三五。失蓋後の写真は『海外遺宝』九八）。

### ◎重環紋鑒

通高一・七センチ、口径三三・四センチ、重さ三・四五キロの、西周後期にありふれた形の盤である。原報告及び『陝西出土西周青銅器（一）』は、本器は上の瓦紋鑒とセットになって用いられたものであるとする。通常であれば、盤とセットになるのは匱であり、盃はむしろ酒器である。また、鑒（盃）が瓦紋で、本器が重環紋と、紋様が異なることにもなる。初めからセットとして組み合わせたとはいへないのではあるまいか。

以上の七件が、本窖藏中、銘文を持たない器群である。これら相互が、あるいはこれらが銘文のある器群とどのような関係にあるのかは、残念ながら考えるべき材料がない。器形や紋様からは類似点を指摘し得る場合もあるけれども、しかし、これらの器群の殆どがさして特徴のない西周後期のありふれた器であるが故に、そうした時代的性格による一般的類似に解消してしまい、問題とすべきまさにこれらの器群としての類似とは必ずしも解釈できないのである。

いずれにせよ、問題として考えるべきは、この陝西省岐山県董家村の窖藏に集められていた器群が、偶然によってではなく、何らかの必然性を以て集められたものであるのかどうか、ということである。以下、章を改めて考察することとしたい。

#### 第四章 陝西省岐山県董家村出土青銅器の持つ意味

本章では、これまでに取り扱ってきた個々の器についての考察を踏まえ、器相互の関連などにも注意しつつ、陝西省岐山県董家村出土窖藏青銅器群の持つ意味について、あらためて考え、まとめておく。

まず最初に、本器群の発見された状態について見ておこう。原報告によれば、この窖藏は一九七五年二月二日に発見されたものであり、地表から三五センチというかなり浅いところで見つかっており、また窖穴も側壁を十分に整えておらず、「草卒」の部類に入るとい<sup>(1)</sup>う。しかし、そのこと自体は珍しいものではなく、周原地区で発見される窖藏は大多数が「草卒」であるとい<sup>(2)</sup>う。その意味では、周原地区で多数見つかっている窖藏のごく普通の例の一つとしてよ<sup>(3)</sup>かろう。また、特定の時期に製作された青銅器だけではなく、幅広い時期にかけての（具体的には中期から後期にかけての）器が混在しているという点についても、ごく普通の例の一つである。本窖藏が、特に他の例と異なるものでもなく、またよほど特異な状況の下に設けられたものではないことが確認されよう。

本窖藏の器群について、その意味を考える上でも重大なのは、含まれている青銅器相互の関係である。具体的には、これはある一族の代々伝えて来た青銅器群であるのか、それとも特に何の関わりもない寄せ集めに過ぎない器群であるのか、ということをまず考えてみなければならない。青銅器が、当時において極めて貴重な宝とされたこと、制作者と関係なく他人が奪い取って用いることもあり得たこと（時代はやや下るが『左伝』にその例は多い）、からすれば、たとえ同じ窖穴からの出土とは言ってもそれらが相互に関係あるものであるかどうかはわからないのである。しかし

ながら、この点について明確に語る材料は青銅器自身にはない。例えば、西周中期に属する裘衛殷・裘衛盃・五祀衛鼎・九年衛鼎の四件が関連を持つことは作者者から明らかである。しかし、この裘衛と、公臣や此とがどういう関係にあるかということは、銘文にも器にも直接判断できる材料はない、と言わざるを得ない。作者者のような直接の要素についてはこういう状況であるので、あとは、他の人物などに関連するものがないか、検討してみるほかはない。銘文を持つものについて、それをひとまず挙げてみたのが表2である。

表2 陝西省岐山県董家村出土青銅器 相互関連項目（銘文を持つ器のみ。）

項目	矩	伯邑父	父	定伯	隳伯	夔	趙	者其	毛	旅	善夫
裘衛殷											
裘衛盃	矩	伯邑父	父	定伯	隳伯	夔	趙	者其			
五祀衛鼎		伯邑父	父	定伯	隳伯	夔	趙	者其			
九年衛鼎	矩							者其			
牧牛匜											
亞鼎											
廟屏鼎											
仲湫父鼎											
善夫旅伯鼎									毛中	旅伯	善夫
善夫伯辛父鼎											善夫
父有司再卣			父								



の岐山県董家村に關係があるもの、とひとまず考えられるのである。甕有嗣甕鬲・鼎の銘文によれば、それらの器は、甕の有嗣である甕が、一族の者が他家へ嫁ぐのに際して製作したいわゆる媵器であり、甕器の出土した岐山県董家村も岐山県賀家村もそれが甕やその有嗣の甕が居た地そのものではない。しかし、甕は甕の臣下（周王からは陪臣）であるから、大國間の場合のように遠距離で結ばれた婚姻であるとも考えにくく、この近接する兩地に女性を嫁がせてきた甕が居たであろう地（甕か）は、今の岐山県から扶風県にまたがる地域の中にあつたものと推される。

なお、甕の名こそ直接には見えていないものの、甕との關係が予想されるのが牧牛匱である。牧牛匱は銘文曰頭に「王、甕の上官に在り」と言う。その甕の地については、卯殷の銘文が参考となる。卯殷は、甕伯が自分の臣である卯に冊命したもので、その命令の内容は「なんじの先祖考をつぎて甕の公室を死司めよ、昔、汝の祖、亦たなんじの父に甕人を死司めんことを令せり。：今、余、隹れ汝に甕宮・甕人を死司めんことを令す。」というものである。卯の家は、祖・父から彼へと三代にわたつて甕に仕え、父の代からは甕人をおさめていたことがわかる。この「甕」には甕の力の及ぶ宮や人が存在したのである。董家村出土青銅器に見える人々と甕との關係を想起すると、牧牛匱銘文冒頭で「王、甕の上官に在り」と言っているのは、まさに甕との關係によつて生じた事態として考えることが可能となる。まことに細い糸ながら、ここに指摘しておきたい。最大限に広く關係を考慮して、裘衛殷、裘衛甕、五祀衛鼎、九年衛鼎、甕有嗣甕鬲、牧牛匱がこうしてつながつてくるのである。

後期の器については、次のような關係が考えられる。善夫旅伯鼎に毛中姬（毛中）・旅伯の名と善夫の官名が見える。作器者である旅伯との關係では旅仲殷があり、あるいは関連する人物であろう。また、官名の善夫との關係では善夫伯辛父鼎がある。善夫旅伯と善夫伯辛父とが同一人物である可能性もないが、無理に結び付ける必要もない。



むしろ、此鼎・殷において此が王から命じられた任務が善夫の統轄であることを思えば、ここにその善夫の作器が入っていることは適当であると思われる。また、善夫旅伯鼎に毛中姫が見えていることが注目される。毛中姫は、その名から毛の族と関係がある人物であろうが、此鼎・殷において此の右者をつとめているのが毛叔であるからである。冊命の右者は、被冊命者よりも上位の人物であり、それも同系の官では上司に当たる者になる場合もある。毛叔が此の直接の上司かどうかは不明ながら（毛叔は司土である）、毛叔と此の間に何らかの関係があってもおかしくはない。その毛一族につながる毛中姫を祀る善夫旅伯も当然毛一族につながる人物であろうし、此はそうした人物をおさめる立場に立ったことになる。<sup>(6)</sup> こうして、此鼎・殷、善夫旅伯鼎、善夫伯辛父鼎、旅仲殷が結び付くこととなった。

同じく後期の器でも、公臣殷は、四件ものセットでありながら、人物などでは本窖藏の他の器と直接の関係を見い出すことはできない。しかし、公臣殷の銘文に見える莽仲は、西周後期の他の金文にも見える重要な人物である。そもそもこの莽の一族は西周時代を通しての有力な族で、王朝の執政クラスに位置していたと見られる。<sup>(7)</sup> その莽と、先此鼎・殷に関して言及した毛の一族とは、実は関係がある。即ち、西周中期の器である班殷に「王令毛伯更莽城公服（王、毛伯に莽城公の服を更ぐことを命ず）」とあるのである。莽城公とは城の地に分族した莽の一族の者であり、毛伯はその官位（服）を継ぐことを命じられたのである。金文の他の例によれば、趯尊の銘文に「王呼内史冊令趯、更厥祖考服（王、内史を呼び趯に冊令せしむ。厥の祖考の服を更げよ）」とあるのが全く同例で、そこでは父を継ぐことを命じられている。金文では他にも「某を更げよ」と命じるものがあり、その場合は某は祖先である場合がほとんどである（申殷蓋、召鼎、召壺、師克盥など）。莽城公の後を何故毛伯が襲うことになったかの事情は不明ながら、この場合も莽城公と毛伯との間に何らかの関係を想定すべきであり、しかもそれは金文の通例からすれば祖先―子孫の

関係ということになる。班殷は西周中期の器であるから、時代としてはやや先立つものではある。しかし、人物関係の網の目の部分として考慮に入れてよいことであろう。そうすると、彝から毛へとつながって、公臣殷も上掲諸器と関連づけることができる。

この班殷の銘文の後半、作器者である毛伯（公）班が、王の命令と賜与に応えて言う中に、「文王王妣聖孫」「文王孫」といった語が見える。これは、文献資料にもある（『左伝』僖公二十四年に「管・蔡・邶・霍・晋・衛・毛……文之昭也」という）ように、この毛が文王から連なる周の一族であることを示すものである。そのみではなく、公臣殷の銘文に見える彝仲の彝の族もまた実は周の一族である。なお、さらには中期から見られる甗が文献に言う棠であるならば、『偽古文』尚書『周官の孔氏伝に「棠、国名、同姓諸侯。」とあるように、実はこれも周と同姓の一族になる。してみると、本窖蔵中の後期の器は、作器者らが毛や彝らとの関係を通して周王室とも近づいていったことを示すことになる。やはりそれは、此という人物の時を以て頂点に達したと想像される。此の作器が群を抜いて多いからである。但し、前述したように、此の作器は数こそ多いものの質的にはむしろ劣悪に近い。青銅器製作をめぐる当時の状況の中で、最良の質の器を製作させてもらえるまでの地位には、まだ此は到達していなかった、ということであらうか。

大変遺憾ながら、関係をつなげていくことが可能なのはここまでである。その他の器については、人物などによって有機的に結び付けていく作業は、目下のところ、糸口を見いだしがたく、不可能と言わざるを得ない。しかし、ここまで見て来たところによれば、本窖蔵中の青銅器は、偶然によってここに集まったものではなく、やはり周王室あるいは執政クラスの大族としたいだけに結び付きを深めていった、ある特定の人々の縁の器が集まっているものと

見るのが妥当ではないかと思われる。個別に見ればそれに外れる器もあるいは存在するかもしれないにせよ、傾向としてはそのように見ておいて大過ないものと考えられるものである。

先に発表した「裘衛諸器銘文考釈」及び「牧牛匜銘文考釈」、それに引き続く今回の考察によって、陝西省岐山県董家村において発見された窖藏青銅器の全てについての検討を終えた。西周中期から後期にかけての多数の器を含むこの窖藏から、果たしていかなることがわかったであろうか。

本窖藏中、最も初期に属し、その活動が明らかなのは裘衛である。彼の製作になる青銅器の銘文からは、彼がその財物と引き換えにして土地を取得し、周王朝の中へと入り込んでいく過程をうかがうことができる。続く牧牛匜からは、牧牛が、あるいはその力を頼み、実力行使に出て咎めを被ることとなったものの、結局は、その勢い侮るべからず、彼に都合のいいような方向で事態が収束したことがうかがえる。そして今回の、此鼎・殷を中心としてその他の器からは、此らが周王室あるいは執政クラスの大族とさらにしだいに結び付きを深めていった過程をうかがうことができるのではないかと考える。

ひとまずのこの考察に大過ないとすれば、この陝西省岐山県董家村出土窖藏青銅器群は、西周中期以降における、王朝内部における変化をうかがうことができる、まことに貴重な資料であるということができよう。そして、例えば先にしばしば言及した甗については、文献にいう栄夷公は「利を好む」人物として記されるが、実はその「利を好む」との具体的な内容は『史記』にも何も記されていない。しかし、董家村出土青銅器群を以て考えれば、まさにそれは

財物を以て近づいてくる人物を厚遇し、彼らが王朝内部に入り込んでくる道筋を設けたものにほかならないことが察せられるのである。当然そのことは王朝内部における旧来の秩序を破壊し、諸侯同士の不和を招き、さらには王の權威を弱める方向にも向かったであろう。文献との突き合わせの可否はしばらくおくとしても、専ら青銅器の方面から検討してみても、そうした傾向は看取せられるであろう。まずはその一つの試みとしての、董家村出土青銅器群に関する初步的な考察である本稿を終えることとしたい。

1 龐懷清ら「陝西省岐山県董家村西周銅器窖穴發掘簡報」『文物』一九七六年第五期。

2 羅西章「周原青銅器窖藏及有關問題的探討」『考古与文物』一九八八年第二期。

3 吳鎮烽編『陝西金文彙編』三秦出版社、一九八九年、「陝西商周青銅器的出土与研究」。

4 西周後期金文に仲柑父殷があり、冒頭で作器者は「師湯父有嗣仲柑父」と言う。「某の有嗣△」という同じ形式であるから、それによると爰有嗣再兩の爰は人名ということになる。但し、爰それ一字が名前として固有名詞であるということとは限らず、爰伯とか爰季とかという時の爰のこととして地名に見ることも可能である。ここではそのように読むのがよいと考える。

5 この見方が成り立つのは、あくまでも爰有嗣再兩・鼎が、嫁して行く際のための腰器であるからである。そういう目的で製作された器ならば、一族の女性が複数いれば複数の地点から出土することには何の不思議もない。もし冊命金文であれば、同銘の器が複数地点から出土することはまことに不審ということになる。

6 西周の冊命金文には、王ないし諸侯が臣下に「我が家の△をおさめよ」と命じている例がある。本文に示した読みによれば、毛叔はまさにそれに該当する内容を此鼎・殷において命令したことになる。その意味では、特に異常な状況を想定した

読みを与えたのではない。

7 松井嘉徳「西周期鄭（奠）の考察」『史林』六九卷四号、一九八六年。

8 翌を文献に言う栄と見、周と同姓の一族とする説は、既に孫詒讓の『古籀餘論』に見えている（卷三、三十七葉、卯殷）。さらに詳しくは、朱鳳瀚『商周家族形態研究』天津古籍出版社、一九九〇年、二三四頁、を参照のこと。